【252】

氏　名(本　籍)	高橋美和(新潟県)
学位の種類	博　士(文　学)
学位記番号	博乙第 1,339 号
学位授与年月日	平成 9 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	**上座仏教徒社会における宗教実践とジェンダーの構築：タイの女性修行者メーチーをめぐって**

主　査	筑波大学教授	博士(文学)	小野澤　正　喜
副　査	筑波大学教授	文学博士	牛　島　　巌
副　査	筑波大学教授		安　藤　正　士
副　査	筑波大学教授	博士(社会学)	駒　井　　洋

論文の内容の要旨

本論文は，タイ仏教徒社会においてメーチーと称される僧院内で修行を続ける女性に焦点をあて，その宗教実践について論考した作品である。論文は，序章，本論（第1，2，3，4章）結語（第5章）から構成されている。

序章「研究の目的と方法」において，タイ上座仏教徒社会に関する研究が逢着している問題群が整理され，在家仏教徒と僧侶組織（サンガ；僧伽）の中間に位置する女性修行者研究のもつ意味が検討されている。これまでのタイ上座仏教徒社会に関する研究は，男性僧侶集団を神聖性の極とし，その周辺に在家信者が組織される社会構成に着目した聖俗論を基調にした論考が主流であった。本論文は，こうした研究状況を克服するために，メーチーの実態と役割を解明し，ジェンダー論への新たな視座を提示することをめざしている。

本論で使用されている資料は，1991年から1993年にかけて行われた寺院における長期参与調査および全国の寺院で行った広域質問票調査からなる資料と，メーチーによって書かれた自叙伝などの各種文献資料である。

第1章「タイ仏教徒女性と僧院：メーチーという修行形態の位置付け」では，メーチーの修行形態が他の実践形態との比較において論じられている。上座仏教徒社会において「女性の僧侶」（比丘尼）の存在は否定されており，メーチーは男性の僧侶（比丘），見習僧等とは明確に区別される「俗人」範疇の存在であることが，歴史的な経緯及び現行制度の両面から解明されている。宗教的功徳を求める在家女性に開かれた宗教的実践形態としては，日常的布施行，集団的短期仮出家，僧院での一日持戒修行等の選択肢があるが，メーチーとしての修業生活は長期出家者である比丘の修行内容に近い形態であることが指摘されている。

第2章「僧院におけるメーチー：比丘との比較」において，メーチーの僧院生活を比丘と比較しつつ分析している。僧院は在家仏教徒に対して功徳を供与する一方，経済的には在家仏教徒の布施と寄進に依存しているが，メーチーと比丘では構造的位置付けが違っている。比丘の生活は僧院全体に対する在家社会の布施によって成り立っているのに対し，メーチーは個々人の蓄えや個人的な経済援助に依拠している。また，比丘は，托鉢，食住等を共同で行っているのに対し，メーチーは個別的な生活を行っている。これは，男性の比丘で構成されるサンガ（僧伽）が在家にとっての功徳の源泉であるのに対して，メーチー集団には宗教的聖性が付与されていないことと対応している。こうした宗教的な劣位の位置付けにもかかわらず，メーチーは，比丘に匹敵する質を示している。多くの場合，戒律の遵守，教理学習，瞑想修行等の面で比丘と同等の修行を行っている。

第３章「メーチー居住僧院と地域性：中部タイと東北タイ」では，広域質問票調査の統計的分析を基礎に，中部と東北部におけるメーチーの地域的差異を論じている。中部タイには大規模僧院が多く，メーチーも教理学習，仏典研究に取り組む傾向が強い。それに対して頭陀行の伝統のある東北タイでは，森林の僧院で瞑想修行を行う僧侶集団が存在し，そうした僧侶に弟子入りするメーチーが多い。これに対応して僧院入り時点の年齢および婚姻状況に関して顕著な差異が認められる。中部では未婚率が高く，僧院入り年齢は20代と50代が最頻域であるのに対し，東北部では，未婚者が僅少で僧院入り年齢は60代が最も高い。中部では婚姻生活に代わる選択肢として僧院入り選択されているのに対し，東北部では人生の最終期を僧院で過ごそうとする選択が多く認められる。

第４章「『僧院入り』の動機・背景」では，個々のメーチーへの面接調査を踏まえた資料およびメーチーによって書かれた自叙伝を基礎に，僧院入りの動機が検討されている。メーチーになった動機を以下の４つの類型に分類することが可能であるとしている。すなわち(1)ケー・ボン（願掛け）に代表される「手段型」，(2)世俗社会から距離をおこうとする「現世逃避型」，(3)老後の僧院入りに代表される「功徳追求型」，(4)修行生活の宗教的意義を重視した「志願修行型」の４種類である。著者はこうした多様性は，メーチーが個人的な事情に沿って種々の意味づけを行っている結果であると分析している。個別の個人史を検討すると，僧院入りの時点から長期滞留に至る過程で，その動機に関して類型間の移行が認められる事例が多いことが指摘されている。このような諸事例の検討を踏まえて，メーチー制度は，種々の動機を持って自己実現を追求する女性仏教徒に対して開かれた柔軟性のある社会的装置であるとしている。そこにおいて，メーチーは在家的な性差役割＝「関係性のジェンダー」から脱却しようとする明確な志向性を示していることを指摘している。

第５章「結語」では上記の議論の総括を行っている。メーチーなる制度が，女性仏教徒に対して，在家生活の拘束から比較的自由な場において，宗教的な自己実現を追求する修行形態を与えていることを確認している。従来，タイ仏教徒社会の統合がサンガ（僧伽）のもつ統合機能によって達成されているとされてきたが，在家仏教徒の半数をなす女性仏教徒に対してメーチー制度のもっている補完的機能が重要であることが論じられている。

審査の結果の要旨

本論文は，現地語の本格的な習得を踏まえ，長期にわたる現地調査を基礎にして得られた資料にもとづき，従来調査研究が遅れていた上座仏教徒社会における女性修行者の実態について詳細な論考を提出しているものである。著者は，僧侶組織の追求する「解脱志向の仏教実践」と在家仏教徒の「功徳志向の仏教実践」の二極構造として把握されてきたタイ上座仏教徒社会というこれまでの理解の仕方からすると，両義的存在とされるメーチーに着目し，調査研究することを通じて，新たな問題群の所在を指摘した点が重要である。

本論文の貢献は以下の諸点に要約することができる。

１．個々のメーチーの個別の動機，試行錯誤の過程等に関して，綿密な参与観察と面接調査を行っており，その成果が確認できる。

２．上座仏教徒社会の構造的枠組みを前提としつつも，本論文で追求されているのは社会的実践主体における内的意味付けの構造の解明である。こうした視角が全編を通じて一貫しており，本論文に統合性を与えている。特に，個人史の検討や動機の分析を行っている第４章は，メーチーの実態に迫る質の高い資料を提供している。

３．メーチーとその他の女性の宗教的実践（準メーチー，集団仮出家者，一日持戒等）との比較検討が，詳細かつ厳密になされており，上座仏教徒社会の未解明であった部分の分析を進展させている。

４．メーチーに対する一般社会の負のイメージとメーチーたち自身の自己実現をめざす意識の間にギャップがあることを明らかにし，そこに従来の社会的役割関係を基礎とするジェンダー像から脱するという明確な志向性の存在を指摘しており，この局面から明らかにする資料を意識的に提示している。

上記のような特徴がある一方，以下のような課題を今後に残している点が指摘できる。

1．ジェンダー論の面では，現在様々な展開を見せている女性運動や仏教的改革運動をも視野に入れるべきであり，今後の調査研究によってより包括的な把握を進めることが期待される。

2．質問票調査によって確認されたメーチーの属性の地域的差異の分析は，タイ仏教徒社会自体の地域差の問題として捉え直しうる可能性があり，今後の課題として残されている。

なお，参照論文4編のうち2編は，第1，2章に充当されているが，大幅な加筆修正を受けて本論文に収録されている。他の2編はモン族仏教徒社会に関する比較資料を提供している。

本論文は，上記のような残された課題はあるが，長期にわたる現地調査に基づきタイ上座仏教徒社会において両義的な存在であるメーチーに関して周到な論考を行った博士論文として十分独創性があり，学界に対して少なからぬ貢献をなすものであると認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。